「木の国・木の仕事」

青森県工業試験場
漆工部長　　九戸　眞樹

ただ今ご紹介を頂きました工業試験場の九戸と申します。１時間１０分ほどよろしくお願いします。青森県工業試験場は地場産業の研究と技術指導を行っている所です。私達の漆工部は津軽塗の仕事，技術開発や流通デザインの指導をしています。私はもともとデザイナーですから，デザインの指導を担当しています。私達の部には３つの柱がありまして，１つ目は，基礎技術をきっちり押さえることです。津軽塗は伝統的な産業です。伝統を守り，今の生活に合うものを造りたい。この産業が次の時代に技術を伝えてゆくための確実な技術とは何かを研究しています。津軽塗は末端産業，すなわち先端産業に比べると末端産業ということになります。ロウテクがどうすれば世の中に出ていけるか考えるとハイテクと握手すること，現代にもマッチする形で出ていくことになります。これが２つ目の革新です。ＣＧ，コンピューターグラフィックを使って津軽塗のデザインをする。先日の新聞にも記事が出ていましたが，弱りつつある産業というのは，日の出の勢いの技術に頼って生きていくことでも運が開けるということです。今，ＣＧデザインに力を入れています。

３つ目は，自立した企業を育てることです。伝統産業というのは足腰が弱い。今まで全部保護されオンブにダッコなので，どうしても自分の力で考えることが出来ません。これからの時代を乗り切る自立した産業にならなければというので，いままでいろんな事務局を背負っていたものを，パッと放しまして自分でやってということで，これが一番業界が育っていくのに良い方法ではないかと思います。そのことによって，自分たちの力にあった書類を作成する。そうしますと，他力本願でなく自分たちの足で歩くことになるので，関係者と接触し人間関係が出来，新しい仕事も増えたりする。いままで頼っていたものが自力でやることによって，新しいものが，新しい道が開けてくると思います。それが自立した企業を育てることになります。

私はときどきこのような場所でお話をさせて頂くことがあるので，心掛けていることがあります。歩くショールームといわれていまして，今日も耳にはブナの天使のイヤリングがついていまして，胸に津軽塗，腕輪はブナコのブレスレット，名刺入れは旭川の方が作ってくれた木の名刺入れ。というように手仕事をたくさん身に付けて歩いています。

デザイナーの役目というのは，堅い仕事を一般の方たちに解りやすくお伝えすることが出来る，と思って仕事をしています。先ほどご紹介した仕事は，じつは全部リンクしておりまして，手の仕事というところで全部つながっているんです。私は手の復権ということを念頭に置き，次の時代に伝わっていく方法がないかと模索しながら，さっきの作品を持って歩いています。このような作品を糸口に話し合い・交流等がされることが多いわけです。「何ですか面白い物をつけていますね」「ああ，ブナですか，ブナの木はこんな色をしているんですか。」というように話がほぐれていきます。

私は「ジャパン・ブナ・フェスティバル」の企画委員を長く続けてまいりました。皆さんのお手元に渡してあります「ジャパン・ブナ・フェスィテバルの歩み」の中にその歴史が書

いてあります。最初にコンペで作品を集め，森の展示をしました。この仕事をさせたのは，憤りでした。その当時は県木ヒバ，ヒバの木の話ばかりでした。ブナはどうしたかというと，都会等からの保護の声に攻められまして林道が通るとか，通らせないとかの声が盛んだった頃だったと思います。何でブナが県の木でないんだと言う事が一つ。そして，「どうして切るんだ，可愛いそうだ」という都会の人達の声にエゴを感じ，それじゃ木で仕事をしている人は可愛いそうでないのかという疑問を抱きました。スタートから「保護・育成・活用」の３本柱でブナを見つめていくことになりました。専門家の中に，何故デザイナーがいるかということになるのですが，デザイナーは“テハイナー“なんですね。手配師。何かと何かを結ぶ。物と物を結べる。あるいは，人と物を結ぶ。人や物を紹介するというときに結構役に立ちます。皆さんの仕事の仲間に入れていただくと柔らかくビジュアルにまとまっていくと思います。いまビジュアルといいましたが，目で見て解りやすい時代というお話をしたいと思います。

今の時代は読んで理解するよりも，一見して一目で解る時代なんです。一番解りやすいのはニュースです。これまでＮＨＫのニュースは映像を流し，ただお話しするだけでしたが，最近のニュース・ステーションは凄いと思います。すぐ現場のパノラマが出来る。飛行機がどう折れたかとか，山がどう崩れたかとか一目で見て解るように，皆が実感ができるようになっています。これは理解の差を少なくするために，目で見て解るという風にまとまってきた結果と思います。ことにデザナーはそういう訓練をしてきています。目で見て解るようにまとめていく仕事がデザイナーのお手伝い出来ることだと思います。感性，センスの良さでいろんなイベントに顔を出し，「ああ，それそれ」と囃子方をする，「もう少しこうしたら良いのではないか」と，堅いお仕事も柔らかくすることが出来ると思います。

先ほどいいました，言葉で伝えるよりも目で見て伝えた方が早い。例えば，「百聞は一見に如かず」の見本として，今日はブナの木を持ってきたんです。柔らかいブナの木を見たことがございますか。木が曲がるんです。これは，ブナの３センチメートルの角材ですが，このように，しなうのです。小学校などでこれを見せますと大抵は驚きの声をあげます。これは，木造町の長内さんというクラフトマンが作ってくれたブナのヘビです。角材に上下から鋸目を入れてこのようにしなうように工夫したものです。これこそ触ってみないと解らない。言葉では柔らかいと言われても，解りませんが，見るとコロンブスの卵ですね。触って見るともっと感触で解ると思います。デザイナーの感性で皆さんの仕事にどういうふうにお役に立つことが出来るだろうかというので，これから３本のスライドを上映したいと思います。

ブナ・フェスティバルは最初から植樹祭を含んだものではなかったんです。もっと木の仕事を見て欲しいということで，スタートいたしました。きっかけとなったのは，ブナの木のパスルや家具をご覧になった方々の声です。ブナの良さをもっと多くの人に伝えたいと弘前大学の沢田教授が提唱して，ブナの魅力を伝える展覧会を弘前のＮＨＫのギャラリーを使って行いました。この展覧会終了後，流通の人，家具，クラフトマン，製材所の方，先生等が集まって反省会を兼ねて話し合いをしました。この時，出て来たのがブナ・フェスティバルなんです。同じ木でもウルシをかけることで木に表情が出てきますが，ブナの木肌を沢田先生は風呂上がりの津軽美人のようだといいました。ピンクの木の肌をもっといろんな人に見て欲しいということで，この展覧会がスタートいたしました。節は節なりに，皮は皮なりに

見ていただく方法があるんじゃないかということで，いろんなデザインがあり，これは木工家の田中さんという方がデザインいたしました。ブナと言えばブナコ。ブナコは，後で技術が出てまいりますが，この時もブナのすべてということで，展示いたしました。ブナの幹の肌を見たことが無い人がいるんじゃないかということで，ブナの木も準備しました。

この写真は企画会議をしているところです。メンバーは，営林署，営林局，県庁の商工課、農林課，デザイナー，実際に山で働いている方から大学の先生と，まさに呉越同舟でした。切る人切られる人，作る人切り刻む人，売る人買う人ということでいろんな立場の方がスタートの案を練りました。第１回目は，ブナの仕事の掘り起こしから始めよう。気が付かない何かいい仕事をしている人がいるんではないか。じゃ全国に呼び掛けてブナの家具，ブナのクラフトを集めましょうと，コンペから始めました。この時は，要請があればフナ材をお送りしました。ですから制作期間を見て長い準備期間でスタートしたんです。審査委員は木のブームを，素木のブームを巻き起こした秋岡芳夫先生という方をお呼びしました。この１回目の展示は中三デパートの青森店を使って行いましたが，それまで私は自然のブナの森に入る機会はなく，ましてブナの木というのもこの運動に携わるまでは知らなかったんです。初めてブナに接する人達には，とってもおもしろい試みであったと思います。弘前営林署の人達にはいろいろとご援助をいただきながら，展示会にこぎつけたわけです。

ブナという字は，木偏に無いと書いてブナと読み，木で無いと言う。非常に悔しい字ですけれども，今はまさに，木偏に貴重の“貴“だと思います。貴いと書いてブナと呼びたいと思います。ブナ材はそれまで，ナラとかの広葉樹の代替品に使われてきました。本来の肌を伝えると言うよりはむしろ，それに似せて作るために着色されて世に出ていったわけです。

青森県でのブナの立場が低いのは，魚箱とかリンゴの箱とか薪といった非常に安いものに加工されていたからです。お隣りの秋田県の秋木株式会社とか，山形県の天童木工などは曲げ木にして高付加価値をつけた製品にして出しているんですが，それに比べて青森県はまだまだ，未熟だと思います。それに「活」を入れるために，たくさんの物を集めようと企画したわけです。

材の特徴は，製材所で働いている人達は良くご存じだと思いますが，一般の人達は見ることもない。前の方に置いてある角材が捩じれています。ブナは水分をたくさん含んでいて，木で無いといわれその価値が低く見られたのは，乾燥が非常に難しい木だったからです。乾燥しているうちに製材した木が暴れて捩じれていく，あるいは，天然乾燥しているうちにフケが入っていく。どんどん腐り（キノコがつくくらいの木ですから）水分が多くて木が腐りやすいのは当然なんですが，そういう欠点があったために，青森県で良い加工がされなかったのです。

これは，象徴的なハカリです。ハンス・ウエグナーという北欧の家具デザイナーの椅子でワイチェアーといいます。リンゴ箱も椅子も４キロです。材は，ウエグナーの材が多少いいところを使われるますけれども，同じ４キロでウエグナーの方は４万円，リンゴ箱の方は１千円はしないと思います。これまでの青森のブナは価格の面でも非常に価値が下がっていました。しかし，これからはもっと高付加価値をつけて，青森県のブナ材として出していきたいと思いこのハカリをつくりました。目指す所はここです。青森県の人が青森県のブナを手にかけて青森県ブランドで出してやる。白神の家具という名前で出ていけば良いですが，あ

そこは切れませんよね。

コンペをやりまして，“グランプリ賞金百万“という呼び声でスタートしたんですが，どうも百万に匹敵するものは１回目では見つかりませんでした。ただ，ブナ材の利用の仕方のバリエーションは集まりました。これは，ブナコに使うテープです。ブナをテープ状にしたものを籠に編んだ物です。アケビの籠を編む武田さんという方ですが，薄い材で立体的にものを作るということで金賞に評価されています。この時は，賞状も副賞の盾もブナにして徹底してブナづくしでやりました。

この写真は，グランプリの次のゴールドプライス。金賞が二つでグランプリの賞金を半分にしました。これは，「わにもっこ」で出品した小径材によるベンチです。細い材もこういう使い方をすると，立派なインテリアオブジェです。例えば，大きな公共空間の真ん中にうねうねと木の椅子が並んでいるだけで，この企業は木を大事にしている会社だというイメージが伝えられると思います。こちらも，第１回のコンペで金賞を受賞しました。

私の役目と言うのはアイデアを出したり，終わってからちょっとスポークスマンしたりする程度なんですが，この時さすが冴えていたなと思われることは「ブナを五感で楽しみましょう」という切り口が出てきました。皆さんにこういうものを見せたい，あういうものを見せたいというお話を箇条書きに書いていたんですが，まとめると，五感で体感するというのはやれそうだなと思いました。体感コーナー，まずは持ち上げる。スギなどはあっというまに私でも持ち上げられますが，切ったばかりのブナはさすがに重いですね。しかも，樹体にどっぷりと浸みれるぐらいに水分を含んでいます。持ち上げて見てその感覚を体験して確かめてもらいました。

次は音です。針葉樹材というのは叩くとボホボホと柔らかい音がいたします。ブナとかナラのように年輪の詰んだ広葉樹材はカンカンという高い音がでます。木琴などにもそういう意味で使われるんでしょうが，これは叩いてもらいました。

匂いは嗅覚ということで，何でやろうかということで，オガクズを嗅いでもらいました。スギ・ヒバ系はツゥンとテレピンの良い匂いがしますが，ブナは鼻を突っ込むとムゥと水の腐ったような匂いがいたします。香りと言うよりは臭いといったほうが良いとおもいます。これで三つ目ですね。

味わうは，どうしましょうか。ブナの実というのは大変美味しいです。皆さんお仕事柄よく食べる事があるかと思いますが，森のピーナツなどと言われ熊が食べるのも無理がないなぁと思うくらい美味しいものです。このほかに凝ったのはブナの焼酎です。味わうと言う事で何か良い方法はないものかと，ブナのオガクズを通した焼酎も作って見ました。この時に商品開発されて今でも残っているのが，ブナの森の水でたてたコーヒーです。久栗坂にお住まいの八桁さんが作ってるブナの森のコーヒー。白神や竜飛などのいろんなシリーズがでていますが，この時がスタートだったんです。

目で見ることを始めとして，五感で体感するブナというのを皆さんに見ていただきました。２回目のコンペではグランプリを出さないわけにはいかないですね。埼玉県でヒノキ工芸という家具メーカーをしている戸沢さんは，鰺ヶ沢出身の方なんですがその工場の若い人達が作ったものです。薄い板材でボリュウムを持たせています。いくら材が豊富にあるからといってお刺身のさくのようにでかいのをそのまま見せるんではなくて，もっと高度加工，高度

な技術を見てもらおうということで，薄い板で五角形の箱を作りました。後ろの方は薄い板材でボリュウムを持たせた鏡ですね。この考え方に皆さんが賛同いたしまして，グランプリ，１００万円が戸沢さんの工場に送られました。

弘前の対馬さんという方が作ってるバイオリンに，ブナを使ってもらいました。針葉樹と広葉樹を甲板に使って音の響きを楽しむのですが，ブナで作った“ツガルウス“というのはどうだ，ということで作ってくれました。非常に微妙なものですからブナが最適な材とはいえないんですが，これもブナの活用の一つとして出品して頂きました。

ブナのドアです。スチールのいろんなドアが出ていますが，特に公共の場にはこのようなブナの木を多用した物を置いてもらうのも良いのではないかと思います。

私達のお手本は北欧の家具です。もともとデンマークは，ブナの森が多い方ではありません。二次林をうまく活用しながら，このような家具を作っています。デザインも優れたもので少ない材料を活用しています。この考え方を青森県に導入していくのが一番の目標なんです。青森と弘前で展覧会を開催しました。東京でも開催して見てもらいました。当時はブナの保護だけが声高に叫ばれている時でしたので，活用というところを，たくさんの人に知ってもらいたいという想いでこれを発表しました。森のリビングです。この時にいろんな方にご援助をいただいたんですが，ゼロックス社には大変ユニークな援助の仕方をしていただきました。ブナの森の写真を大きな布にコピーして下さいました。このような形の援助というのは大変嬉しかったです。お金で援助してくれるよりも，企業の持っている能力で森を応援してくれるという新しい方法を見出だす事ができました。

出品したのは家具だけではありません。後ろにかけてあるのは南部の菱刺しです。菱刺しのベイジュの部分はブナの木で染めてあります。家具，クラフトだけではなく，オガクズさえも染色に使うことが出来るんだという提案になったと思います。展覧会等をやりますといろんな人達の助力を仰ぐわけですが，バードガービングの方たちが，小鳥を吊り取り下げてくれたり，家具の側に置いて下さったりしたので，非常にリアリテイのある展示になりました。もちろん，東京ではブナの苗木も販売しました。

これは，第６回のブナ・フェスティバルです。フェスティバルを続けていく中で，植樹祭やコンサートだけということで，３年ばかり展覧会を休みましたが，その間に白神山地が世界遺産に登録されたこともあり，もう一度森の効用を見直そうというテーマで展覧会を開催しました。森は空気清浄機です。時々マスコミに出てくる言葉ですが，日常，便利な生活をしていると忘れてしまいがちです。森とか木とかというとすぐ出てくる話なんです。　一人の人が出す二酸化炭素の排出量を，木がどれだけ吸収してくれるかという話をビジュアルにまとめてあります。縄文時代に煮炊きして出た二酸化炭素を吸収するために使った木はこれですみましたけれども，いま，自動車の排気ガスや，工場を運営していくためにその排出された二酸化炭素を吸収する森というのは，さっきの比ではないわけです。これは目で見てすぐ解っていただけたと思います。成長の著しい木を，たくさん植えてどんどん二酸化炭素を固定化し，それで家具を作って都市へ持っていくという。炭素の平均化ということが地球にとって一番大事なことなんです。説明することが難しいのか，ここがどうもまだ一般の方々に解っていただけない部分じゃないかと思います。それでレジメの下の方にあるのが，学校の椅子で比べた比較です。木の椅子は壊れても昔は用務員さんが直してくれましたが，パイ

プ椅子はそのままでずうっと残骸は残ります。比較すると木の椅子は高いけれど，地球に対する保険ということがいえると思います。

新しい家具，それからクラフト，子供のためのパズルとか見ていただきました。と同時に，山の暮らしというものをマスコミの方たちも，都会の方たちも忘れがちなんです。先程のアンケートでも，楽しみにくることはいいんですが，そこで生活している人がいるということをついつい都会の人達は忘れてしまいます。いまの新幹線問題でも報道を聞いていると大変怒りを覚えます。山にだって，地方にだって人は暮らしているんだというところをもっともっと大きな声でアピールしていかないといけないと思います。過去の生活を懐かしむのでは無くて，新たな山の仕事があるんだと言う事をもっとアピールしていかなくてはいけないと思います。このコーナーでは，自分たちの仕事のブナ植樹祭，あるいは里親制度というものをアピールいたしました。最近では，巨木の森コンサートと２日セットで植樹祭を開催しております。こちらのコーナーは村の物産ですとか特産品を販売いたしました。

皆さんに大変お世話になって開催してきました植樹祭の記録です。

植樹祭には，５００人以上の人達が入るということで，いろんな分野の人達が集まって堅い会議を何度か繰り返し行いました。例えば，人の移動をバスの確保とか，山に歩道をつけるのに土木関係者とか，安全対策のために役所関係の人たちとかが集まって会議を開いたわけです。

木を植える資金を集めるために何か良い方法は無いかなあと考えたのが里親制度です。募金を募ろうと里親を広告や展示会場で募集しました。

初めてのブナ植樹祭は，雨模様だったんですが，４００人近い人達が参加しました。これは，準備をなさった方も大変だったと思います。

２回目からは，想いもしないことが起こり，参加者が１，０００人を越えました。都会からもたくさんの人達が来ました。あの山の中の尾太鉱山の近くですが，１，０００人の人達が木を植えるために集まったんです。

西目屋村の村長にも，もうひと踏ん張りしていただかないと，白神の里，情報発信性というのではまだまだやることがあると思います。

この辺の方たちは，皆さんご存知ですので軽装でということは無いんですが，東京のほうから来る人達の中にはとんでもない格好をしてくる人が中にはおります。３回目からは地元の小中学生も参加しました。地元の小学生といえども自分たちの森に入ったことがないという子が非常に多かったんです。弘前などに遊びにいってしまんですね。昔のように親が子供達に遊び方を森で教える事などはなくなりました。中学生，小学生のみなさんを招待して木を植えました。私はこのような催しをして本当に良かったなぁと思うのは，こういう写真が撮れたことです。子供達が次の世代にこの林業を伝えてる姿というのがビジュアルで撮れるということは，とっても良いことだと思います。小学生が木を植える。親子で木を植える。でも，その木は貴方の木では無い。貴方の孫あたりの木になるでしょうと言う事で，写真を撮っておくことで，林業の新しいイメージアップにもつながっていくのではないかと思います。

いろんなイベントをしましけれど，“ブナの学校“というのを現地で開きました。姉崎さんと稲本さんという方に来ていただきました。稲本さんは，ドングリで，ナラを植えるんで

す。ナラを植えている人にブナを植えてもらうのも良いなぁということで，これが“お手植え“の写真です。姉崎さんは木の写真家です。いろんなところの木の写真集を出しています。

こういう人達がはいっていただきますと，また，情報発信をしてくれるんです。仲間だけではなく，できるだけ“異分子“の方を，別分野の人達を取り込んでいくことで，どっかへいってまたそのお話をしてくる。稲本さんは，びっくりしたと言ってました。普通，植樹祭というのは差と山の整えられた所でやると思ってたのが，ほんとうに山に入るんですねーとか，関心されました。ブナ林を渡る風が心地良いところでブナに対する思いを語っていただきました。

植樹した後のイベント，午後のイベントはいろいろ試みました。ヤマメの放流，イワナの放流をやりましたら，地元産じゃないと生態系が壊れるんではないかとか，すぐアンケートで戻ってくるんです。今は，多分イワナを放流していると思います。この写真はどちらか分かりませんが，子供達に稚魚を放流してもらいました。

豚汁の鍋も最初はこの半分位だったんですが，千人規模になりますとこのような大きな鍋が必要になり，マイタケ入りの豚汁をふるまっております。

毎回現地で開く山菜教室は，岩木山麓の“ブナコ食堂“の秋田さんが講師で開催しますが，非常に好評です。ウドの皮のキンピラというのは初めて食べたというのも，アンケートに紹介されていました。タケノコの焼いたのも初めてという人が多かったようです。

この写真のように，もともとブナはこんふうにたくさん芽が出てくるんですが，これが1本1本成長するには自然淘汰があります。私達は，出来れば白神のブナを苗床に移して成長させ，それを元にまた戻してやるということが出来ないかなあということで，新しく苗床を作るという話を西目屋村の高齢者対策で考えているところです。

植えたからといって全てが育つわけではないんです。兎にかじられたりいろんな被害に遭うということを機会があれば話をしています。これは，一番最初に植えたブナがようやく成長してきたところです。下草を刈っているからやっとこれぐらい見えるんです。このように植えっぱなしではなくて，できるだけ事後調査をして，ブナの里親の方にお伝え，お手紙を書くという仕事もしています。

翌日，「巨木の森」でコンサートが開かれます。巨木の森を登っていきますと，まずは，お山参詣の囃子で迎えられます。2年前の出し物は，岩木山麓の獅子舞連合会の方々が四組，谷に向かって山の上から降りて来たんです。これには，胸が震えるくらいの感動を覚えました。中には小さい子供達が獅子になって，足元を確かめながら降りてくるんです。ほんとうに自然の緑とマッチした良い写真がたくさん撮れました。

出し物はその年によって違います。基本になるのは，横田年昭さんという笛の奏者ですが，その方プラス何々ということでやっています。真ん中にいるオレンジ色は文楽人形です。記念撮影をしているところですが，文楽の人形がきたり，あるいはこれは，荒叫会の太鼓です。それから三味線があったり，これは弘前交響楽団の弦楽四重奏です。クラシックを聞くというのも心が洗われる思いがいたします。ブナの森をバックにしたバレーは，まるで森の妖精のようでした。

巨木の森コンサートは，厳木舞台を作る会というのが企画をしておりまして，前日，ブナの植樹で流した汗をここで癒してもらうというような，連動した企画にしております。

この他に，ジャズバンドとか，雪の上で遊んだりというような，楽しみ方をして２日間を過ごしていただくわけです。

デザイナーがどういう形で青森県の木をＰＲ出来るでしょうか。これは弘前市の観光館にあった子供の城です。子供がたくさん集まって好評だったんです。お母さんたちやおじいさんが子供を連れて遊びにきていたんですが，うるさいのでやっかまれまして，今は弥生の公園に移されてしまいました。最初は木のもので子供の物を作ってくださいということで，弘前市からお願いされました。子供が集まる場所に，木の暖かさが感じられる何か出来ないだろうかと，子供の城と名付けて５人で分担して仕事をいたしました。これは棚ですね。棚の中にはお面が入ったりとか，アヤ取りの糸が入っていたりして，棚の前面に動物のマークがついていて，子供達が喜べるようになっています。テーブルは低いんです。15cm位しかありません。厚い板で低いテーブルになっています。これはテーブルの上にあがって遊んでも良いように設計をしてあります。下には大きなパズルが入っています。間に発砲スチロールを挟んだ，シナベニヤの１ｍ以上のパズルです。この写真のように，テーブル上に腰を掛けて木の感触を楽しむことが出来ます。

壁も木で穴をあけたウオールです。これに木の棒を挿しまして絵を書きます。

これもやはり大きなバズルです。子供達は遊びの天才でこちらが予想したような遊び方はしてくれません。これは全部開けて，また元どおりにきれいに治まるかというパズルに作ったんですが，あの木のテーブルの上に積み上げていく。積み上げていって倒した所で，倒した人の負けというゲームにつくっていました。これは木コロです。木のこっぱをサンダーで削っていって，子供が掴みやすいように角を落とした形にしてあります。木コロとくれば木の玉です。これはロクロで作った木の玉です。桐の玉は軽く，広葉樹の玉は重くというように感触を楽しみます。あるいは，小さい子供がコロコロ転がして遊んでいます。籠もブナの籠です。

これもブナの木で作ったパズルです。プラスチックスを，今，タマゴッチとかテトリスとかプラスチックスに常時触っている子供が増えたんですが，子供の時代は出来るだけたくさんの素材に触るべきなんです。しかも自然素材，天然素材の良さを手が記憶していないと大人になってから困ることがあるのです。手がいろんな素材を記憶するというのが，ものを再現するためにも非常に有効なことなんです。せめて子供時代は高いけど木の玩具を与えてください。これは木の小板を倒していくドミノです。

これは木で絵合わせをする，クルクルと回して絵合わせをしていく玩具です。これは木で作ったギヤーでハンドルを掴んでグルグル回すと，この人形たちがグリグリとまわります。木でも結構精密な仕事ができます。北国の木，青森県の木材で作ったパズルで，穴が開いていましてズラしていくとストンストンと棒が落ちていくパズルです。

青森県が家具市場で弱いのは実はスタンダードがないからなんです。良い製品，決まりきった製品，定番ができれば青森県はもっともっとＰＲができると思います。これは「わにもっこ」の作品で東京の荻野克彦デザイナーにお願いしてつくっものです。荻野さんは木の良さを十分に知っているデザイナーです。ここは，新宿パークタワーのオゾンホールのインテリアのスペースです。今回作ったのはブナの木の生涯学習家具です。子供のときから大人になるまで少しづつ高さを上げていくことで，一生使える家具が出来ないか。あるいは，趣味

に使える家具にならないかということで，生涯学習家具をテーマにスタンダードづくりをはじめました。カタログも作成し，ぽつぽつと注文がくるようになりました。定番の商品という，これだという商品がまだまだ青森県には少なすぎます。彼等が次々と商品を考え出していって，ぜひこれが欲しいという商品に育つまでまたまだ時間がかかると思います。

これは軽い材で作ったんですが，お年寄りの椅子なんです。老人用の椅子。どこが老人用かといいますと，お年寄りは座っていて座から立つ時に膝の力が弱いので，なかなか立てません。バネの力を借りて前の方に体重を移動させることで座面がはね上がり，すんなり立てるです。スチールの家具ではなく，木の家具が老人等の施設に入っていくためには，作るほうからの提案だけでなく，使うほうからも声をだしていただくと有り難いと思います。これは，スギを活用した現代風の囲炉裏です。これはヒバを使った子供の椅子です。これはブーツヌギです。これなどはスキー場などに並べるとか，あるいはペンションにこれがあると木の活用になるんじゃないかと思います。

ここからはデザイナーの感性で，木をもっといろんな所へ出してやりましょうという話です。鉄骨と合わせた鳥の足のテーブル。木は木だけというのではなく，異種材と組み合わせてもまだまだ活用できます。いまにも走りそうなテーブルです。子供のものにはもっともっと木が使われなければなりません。これは木兎で，耳のところを持って木馬と同じように遊びます。ブナの木馬です。残念ながらこのようなものは見る機会が少ない。これが木造町の長内さんが作ったウッドスプリング，木のバネで作った動物たちです。長内さんという方はほんとうに木を不思議に使う方で，これはリボンが飛んでいるように見えますが，糸鋸盤に傾斜をつけてカットしてあります。このリボンは断片を見ると菱形をしているんです。まるで針金が宙に舞っているように木で表現しています。彼は常に新しい使い方をいろいろ考えています。彼等がやっている木造町のオブジェ展の中から八戸市の高橋みのるさんの木のメカニズムの作品です。風を受けると木で作った歯車がつぎから次へとグルグル回っていくというオブジェです。木造町の平滝沼でやっているオブジェ展なんですが，これは，長内さんが提唱して始めたものなんです。クラフトが部屋の中だけでなく，もっと自然のなかに出ていくと，いろんな表情を見せてくれるというのです。これは大湯さんの作品ですが，脚立にあがって上からみるんです。普通の平らなところでは良く見えないんですが，高い脚立の上から見ると木材で描いた大きな顔の全体が良く見えるオブジェです。

最後は，青森県が誇りますブナの技術，木の加工技術では，世界一と思われるブナコをご紹介したいと思います。ブナのテープを巻き上げて皿から鉢までいろんなフォルムが出来ます。真っ直ぐあげていきますと傾斜のきついモノができます。少しづつずらしていくとお皿が出来ます。カーブをつけていくとボールになります。というように，同じ巻板からでもテープの取り方によっていろんな表情を見せてくれます。左側が巻き板で，これをどんどん上げていって，加工の仕方で自由に作れます。かなりのボリュウムのものが出来ますが，捨てているところは無いんです。普通，木の鉢を作りますと，ロクロで削りますから内も外も相当なオガクズがでます。ブナコには捨てることがないんです。正倉院の漆　瓶という御物のなかにも同じような技術を使ったものがあります。これは，曲げ輪を積み上げていった技術ですが，レントゲンで撮るとこのように曲げ輪で表現していることが解ります。伝統の技術を今に活かしたものです。最初は青森県工業試験場で漆の木地として考えられたもだったの

です。上下だけでなく左右に逆に出していきますと，まるで貝殻のようなシエル構造の造型もすることが出来ます。これは真ん中に電球を入れてランプにしたものです。これは，ブナを巻いているところです。芯から巻いていくこともありますし，中にベニヤ板を抱いて押しあげていくこともあります。整形するのは湯のみ茶碗，しかもいまの綺麗な湯のみ茶碗ではなく昔の分厚い湯のみ茶碗です。整形したものをボンドで止めて塗装して仕上げます。

これは，三内丸山から出てきた木の鉢です。木の国青森県は，三内丸山から木の器が出てきたことで本当に助かりました。私は漆工の仕事をしていますので，漆器が出てきたことが非常に励みになりました。いま，いろんな工芸家の方を三内丸山にご案内して実物を見ていただいています。縄文人の加工技術というのは非常に精度が高いです。高度な木工技術，加工技術を持っています。これは漆の鉢ですが，高台のついた鉢を作っているんです。青森県というのは縄文時代から非常に良い木の仕事をしてきたところです。

私達は木の仕事を通じて何をしているのでしょうか。林業や伝統産業を脅かしているのは，私達自身だと思います。私達自身が便利さを求めるゆえに，本来でしたらサスティナブルデザイン再生として可能な仕事をしてきた林業，伝統産業がかたすみに追いやられてしまう。それともう一つは，ホワイトカラー優先，学力偏重という今の学校教育も見直して頂きたいと思っています。もっと物を作りながら考える力を養っていただきたい。いまの日本の工業社会の基礎を作ったのは，松下幸之助とか早川シャープの創始者たちでしたが，あの方たちは12,3才という若い年のときに物をたくさん生産するという現場で育てられました。物を作る仕事をしながらこういう工夫は出来ないだろうか，早く作ることは出来ないだろうかということを身をもって体験したからこそ，今の工業の素地が出来たわけです。手に技術のない何にも作らない子供達が大人になる２１世紀の時代にどういう仕事をするのか大変心配なところがあります。

「木の国，木の仕事」ブルーウッズカントリー，青森県という森の字のついた県です。21世紀に森が担う役割は非常に大きなものがあると思います。ブナフィステバルは皆さんのお力を頼りにしてこれまでやってまいりました。これからもますます皆さんのお仕事は重要性を増していくんではないかと思います。これからはいろんな業種の方々と，手を組んで知恵を出し合って，新しい林業の方向性をつくることが出来ればと思って話をさせて頂きました。

どうもありがとうございました。

ジャパン・ブナ・フェスティバルの歩み

	内　容	ブナの森 自然と恵み展	コンペ	シンポ	ブナ植樹祭 場所・本数	午後の イベント	参加者の特徴	巨木の森 コンサート	ブナベアレント 募金
1990 平成2年	第1回 コンペ・展示	2/16-21 中三青森本店 11000人	第1回 ブナコンペ					6/24 横田年昭 パントマイム	
1991 3年	第2回 シンポ・コンペ 展示・植樹	2/22-27　中三弘前店 弘前市立観光館 6/6-19　東京ガス 20000人	第2回 ブナコンペ	2/21 秋岡・煙山 佐々木・大槻 根深・篭・澤田	5/26　第1回 尾太国有林1h 400人2000本			6/30 横田年昭 文楽人形	700人 150万円
1992 4年	第3回 植樹・コンサ				5/30　第2回 尾太国有林2h 1100人7000本	釣瓶落し峠 暗門の滝 山菜採り	アムウエイ 自由の森高校55人 国士舘大学13人	5/31 横田年昭 創作楽器 文楽人形	2100人 1400万円
1993 5年	第4回 植樹・コンサ				5/29　第3回 尾太国有林2h 1100人7000本	山菜教室 ブナ原生林の散策 前回までの植樹地	小学56年生50名 パンフレット作成 ブナを育ててみよう	5/30 横田年昭・千世子 山上進 荒吐会太鼓	2300人 1200万円
1994 6年	第5回 植樹・コンサ			5/28現地 ブナの学校 根深・姉崎 稲本・山内	5/28　第4回 尾太国有林2h 1000人7000本	山菜教室 ヤマメの放流 ブナ林の散策	小中学生80名	5/29 横田年昭 弘前市民交響楽団 アカネバレエ	1771人 970万円
1995 7年	第6回 シンポ・展示 植樹・コンサ	5/17-24 中三弘前店		5/20ホール ブナの学校 根深・澤田 稲本・山内	5/27　第5回 尾太国有林1h 800人3500本	山菜教室 イワナの放流 ブナ林の散策	小中学生80名	5/28 横田年昭 クニ河内 岩木山麓獅子舞連	1700人 840万円
1996 8年	第7回 植樹・コンサ				5/25　第6回 アクアグリーンビレッジANMON 650人200本	山菜教室 イワナの放流 ブナ林の散策 育樹ツアー	小中学生80名	5/26 横田年昭 ニュービート 伊奈かっぺい	1101人 542万円
1997 9年									

今の小学校で使われるいす	較べてみると	今から３０年前の小学校のいす
メラミン合板　　鉄パイプ 約９００ｇ＋約２，６００ｇ	使われる材料は？	木材 約３，８００ｇ
手触りが冷たい・音がうるさい	使いごこちは	手触りが温かい・音が柔らかい
１m^3で３３０脚分の背と座がとれるとして(433,794kcal／m^3) 粗鋼生産にかかるエネルギーは(５，６５７kcal／kg) 約１６，０４６Kcal	素材生産に必要な エネルギー	１m^3で８０脚のいすが出来るとして 68623kcal／m^3 約８５７Kcal
鋼滓等、土中に残るもの (460kg/t) 約１，１９６ｇ	製造の際に出る 産業廃棄物	おが屑・鉋屑等腐るもの (10%) 約３８０ｇ
合板$_{74g/m}$＋鉄$_{1339g/m}$ １，４１２ｇ	放出される 二酸化炭素CO_2	製材 ４８ｇ
背と座の合板に少しある ７５１ｇ (248kg/m^3)	いすに蓄えられた 炭素の量	使っている間は炭素の貯蔵庫 ３，１２５ｇ (250kg/m^3)
約１０年で外れる歪む 校内で修理は難しい	耐久性は	約２０年保つ 校内で簡単に修理が出来る
土中に埋めても 合板は樹脂が残って約２０年 鉄パイプは約１００年残る	地球に還るには	土中に埋めれば 有機物だから微生物が 約５～１０年で分解し土に還る
約６，０００円 安いけどマイナスの遺産が残る	お値段は？	約１５，０００円 高いけど地球環境にかける保険

大林組地球環境部「建設業の資源利用解析と環境負荷の推定」による